

令和3年度
興南中学校
入学試験問題

推 薦

国 語

令和2年12月5日（土）実施 45分／100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は45分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、小学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】 次の詩と鑑賞文を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書かいしよで丁寧に記入せよ。

『大漁』

金子みすゞ^{*1}

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鰯*2の

大漁だ。

浜はまは祭りの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鰯いわしの（X）

するだろう。

金子みすゞは、(Y)と同様、あらゆるものに生命を認める考え方をもった詩人だ。動物や植物をはじめとして、場合によっては石までも生きているとする世界観は、原始的な宗教や子供の心性に典型的に見られる。(Y)は、『^{*3}檜ノ木大学の野宿』で地中の鉱石たちの声を聴く力を描いているし、金子みすゞは、石ころを「きのうは子どもを／ころばせて／きようはお馬を／つまずかず」と歌っている。みすゞの作品を発掘した矢崎節夫はみすゞの童謡を「小さきもの、力の弱いもの、無名なもの、無用なもの、この地球という星に存在する、すべてのものに対する、祈りのうただった」と言っている。みすゞは山口県の仙崎という漁師町で育った。その町では大羽鱈の時期になると、夜中じゅう子どもまでが総出でにぎやかに地引き網の網を引いていた。「この詩」の持つ力はそうした原風景からきているのだろう。

【 齋藤 孝『声に出して読みたい日本語①』草思社文庫 ※問題作成の都合上、一部改変 】

【 語注 】

- * 1 金子みすゞ 大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した日本の童謡詩人
- * 2 大羽鱈 ニシン科の海水魚。大きいサイズのイワシ
- * 3 『檜ノ木』 一九四三年に発表された童話
- * 4 矢崎節夫 児童文学作家で童謡詩人、金子みすゞの作品を発掘し、『金子みすゞ全集』を編集した
- * 5 地引き網 漁法のひとつ、網の両端につけた引き綱を引き浜辺に引きあげる
- * 6 原風景 懐かしさのある風景のこと

問一 傍線部①「石までも生きてゐる」とあるが、このような表現技法として最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 倒置法 イ 隠喩法 ウ 擬人法 エ 体言止め

問二 傍線部②「原始」の対義語として最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 文明 イ 未来 ウ 終始 エ 自然

問三 傍線部③「祈りのうただった」とはどういうことか。最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 金子みすゞの詩は様々な物事に目を向け、思いやりやいたわりの大切さに気付かせるということ。

イ 金子みすゞの詩は色どり豊かな言葉を用い、読む人に強いイメージをもたせているということ。

ウ 金子みすゞの詩は写実的な表現が多く、現実世界を生きる人に生きる希望をもたせているということ。

エ 金子みすゞの詩は動物の命に目を向け、命の大切さを考えることができるものとなっているということ。

問四 傍線部④「大羽鱈の時期」とあるが、その季節は秋である。次の俳句のうち、秋の季語を用いた俳句として最も適當なものを

次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 青天へ梅のつぼみがかけのぼる イ やわらかく重ねて月見団子かな

ウ ビー玉を沈め金魚をよるこぼす エ ストープの中の炎がとんでおり

問五 傍線部⑤「にぎやかに」がくわしく説明している部分として最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 総出で イ 地引き網の ウ 綱を エ 引いていた

問六 (X)に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア たんじょう日 イ べんきょう ウ とむらい エ おたのしみ会

問七 傍線部⑥「この詩」について次の問いに答えよ。

1 詩の説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 詩の前半では視覚的に模写し、後半では想像した海の中の様子を、リズムにのせてまとめている。

イ 詩の前半では作者の心情を、後半では鯉の心情を、どちらも鯉の視点から表現している。

ウ 詩の前半では町の状況を、後半では海のなかの様子を、作者の視点から写實的に表現している。

エ 詩の前半も後半も言い切りの形で区切り、文末に句点を置くことで後半部分を強めている。

2 詩の主題として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 人生は短い、今を大切に生きていこう。 イ みんなが同じではない、人それぞれ長所は異なる。

ウ 力を合わせて誠実に生きることが大切である。 エ ひとつの出来事に対して、いろいろなとらえかたがある。

問八 (Y)には、『風の又三郎』や『雨ニモマケズ』を書いた現代詩人の名前が入る。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 谷川俊太郎 イ 中原中也 ウ 宮沢賢治 エ 相田みつを

※問題は次へ続く

【二】次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答题紙に楷書で丁寧^{ていねい}に記入せよ。

一九八九年（平成元年）十一月三日。首里城正殿^{しゅりやうせいだん}の起工式^{きこうしき}が行われた。一九八六年（昭和六一年）第二次世界大戦^{だいにせかいたいせん}で焼失^{しょうしつ}した首里城の正殿^aフクゲンの事業化^{せぎょうか}が閣議^{かくぎ}決定されてから約三年後のことだった。

首里城跡^{しゅりやうせき}の遺構^{いこう}からは、五二〇〇枚におよぶ瓦^{かわら}の破片^{はへん}が発掘^{はつくつ}されていた。その破片は、赤と黒の瓦^①が混在^{こんざい}し、首里城フクゲンにおいて、瓦の色は赤か黒かという謎^{なぞ}を生んだ。

この謎は、琉球王国^{りゅうきゅうおうこく}が成立したところからの歴史をひもとくことで解明された。赤瓦と黒瓦の違いは、焼き方の違いにあり、簡単に言えば、少ない燃料^②で効率的に焼けるのが赤瓦だった。琉球王国では一七世紀以降瓦^③の需要が増大したため、経済的な赤瓦を用いたと考えるのが一番自然だった。

今では、赤瓦の街並み^{まちなみ}は、沖縄の原風景ともいえる。沖縄の町を題材にした絵画^bには、ほとんどいいほど赤瓦が描かれている。写真を見て、そこに赤瓦の家並みが写っていれば、多くの人が沖縄の景色であることを認識できる。

ただし、赤瓦には決定的な問題点があった。強度と吸水性である。黒瓦よりも低温で焼かれる赤瓦は、焼きしめて強度と撥水性^{*6}を出すのが困難だった。

*7 プロジェクトは、あえて困難な条件を瓦に要求した。

瓦の質が悪ければ、雨水の侵入^{しんにゅう}による建物の傷みはさけられない。首里城の瓦は五万五〇〇枚もある。強い台風から建物を守るためにも、瓦本来の機能を極限^{きょくげん}まで高める必要があった。

赤瓦の気品を失わず、なおかつ強度があり、吸水性を抑えた瓦。プロジェクトが設定したのは吸水率九%以下というものだったが、

それは沖繩の瓦職人たちにとって、あまりにも高いハードルだった。戦後コンクリート住宅が普及していくと、瓦産業は衰退の一途をたどっていた。廃業する瓦職人が大勢いた。残っていた瓦業者も厳しい向かい風の中で規模を縮小しつつ細々と経営を維持している状況。とても五万五〇〇〇枚もの赤瓦を今の設備で焼くことなど不可能であった。プロジェクトでは、奈良にある瓦研究所への依頼も検討されていた。

ある日、その経緯を、瓦業者を集めた会合で説明していた時、

「俺がやります」

椅子から立ち上がった男がいた。奥原崇典だった。集まった瓦職人のほとんどはネンパイ者であるなかで、彼はまだ三〇代だった。しかも本職は瓦職人ではなく、画家だった。

奥原崇典は水墨画をベースにした色彩感覚に富む斬新な画風でフランスの国際コンクールでも入選し画家としては順風満帆なスタートを切っていた。将来も囑望されていた。その男に首里城の赤瓦を焼く決意をさせたのは、父の存在であった。「瓦は魂を守るもの」が口ぐせだった父奥原崇実は、沖繩を代表する瓦職人で仕事の速さ、技術の確かさに加えて、創意工夫ができる職人だった。

首里城正殿フクゲンの事業化が決まったとき、崇実は七〇歳を超えていたが、「首里城の瓦は、俺が焼く」と口にした。沖繩一、腕が立つといわれている職人の自尊心、そして己の悲願でもあったろう。(X)叶わなかった。病に倒れた崇実は生死の淵をさまよった。

父のやり残した仕事を継承できるのは自分しかない、と崇典は思った。

そこから(Y)の日々が始まった。何種類もの土を探し出し、何度も何度も土の配合を変え、温度を調整する。サンプルを試験場で焼き上げるまでに一年を要した。一億円の融資を受けて設備投資も行った。新工場が完成し、試験場での研究で得られたデー

タをもとに、窯かまに向かった。自信はあった。

しかし、窯を開けた瞬間目にしたものは「瓦」ではなかった。沖縄の土は想像以上にやっかいだった。沖縄の土は焼くときの適切な温度帯が極端きょくたんにせまい。試験場でのデータでは一〇七〇度前後で焼けば強度があり、吸水率の低い赤瓦が焼けるとわかっていた。しかし、一〇度高くなると色が黒くなり、一〇度低いと吸水率が上がってしまう。温度の微妙びみょうな調整、窯に送り込む空気の量が適切でなければ「魂を守る瓦」は作れない。窯を開ける度に、目の前には地獄じじくがあった。崇典の精神状態はぎりぎりまで追い込まれていた。「炎を見ろ」、極限状態の息子にかけた父の言葉である。土と温度の関係は、炎の色で見極められる。沖縄一の職人としての父崇実の持論であった。これまでデータの数値ばかりに頼っていたのではないか。崇典は改めて炎を見た。温度計を無視し炎を見つめ続けた。火入れから三〇時間。窯の中がいままでにみたことのない状態になった。瓦が炎と溶け合い、透明に見えた。崇典は夢中で窯に空気を送り込んだ。

夜が明けた。祈りながら窯を開いた。いく度となくみてきた地獄はそこにはなく、気品ある赤瓦がそこにはあった。^⑦

【注釈】
【 1 』『炎を見ろ 赤き城の伝説』く首里城・執念しゅうねんの親子瓦く』NHK出版 ※問題の作成の都合上、一部改変】

- * 1 起工式 工事を始めるときに行う式のこと
- * 2 閣議 内閣総理大臣がひらく会議
- * 3 遺構 昔の建造物などのあと
- * 4 需要 必要としてもとめること
- * 5 焼きしめて 焼き物をするときに水分を除去するために低火度で焼くこと

- * 6 撥水性 水をはじく性質
- * 7 プロジェクト 首里城を再建するために立ち上げられた事業
- * 8 水墨画 墨(すみ)だけで書いた絵
- * 9 斬新 アイデアが新しいこと
- * 10 囑望 才能を見込まれて成功を望まれること
- * 11 自尊心 自分という存在に自信を持つこと
- * 12 融資 資金を貸してくれること

問一 二重傍線部 a、d のカタカナは漢字で、漢字は読みをひらがなで答えよ。

- a 正殿フクゲンの事業化
- b 沖縄の町を題材にした絵画
- c 職人のほとんどはネンパイ者で
- d 創意工夫

問二 傍線部①「赤と黒の瓦」とあるが、赤瓦と黒瓦の特徴をまとめた次の表について、それぞれの観点①～⑥に入る項目を、ア・イどちらかを選び、記号で答えよ。

観点	赤瓦	黒瓦	選択肢
焼く温度	①	②	ア 高い イ 低い
強度	③	④	ア 強い イ 弱い
吸水性	⑤	⑥	ア 高い イ 低い

問三 傍線部②「少ない燃料で効率的に焼ける」とあるが、それと同じ意味で用いられている言葉を本文中から三字で抜き出して答えよ。

問四 傍線部③「困難な条件を瓦に要求した」とあるが、プロジェクトが求めた瓦とはどのような瓦か。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 沖繩の雨水の侵入を防ぎ、十分な強度を備えている瓦
- イ 強度と低い吸水性を備え、上品でおもむきのある瓦
- ウ 沖繩の雨水の侵入を防ぎ、費用もおさえられている瓦
- エ 気品と、十分な強度を兼ね備えている瓦

問五 傍線部④「プロジェクトでは、奈良にあるくされていった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 瓦職人の減少や、設備の問題があり、大量を瓦の焼くことができなかつたから。
- イ 瓦職人の減少や、材料となる土が不足するなど、必要な量の瓦を焼くことができなかつたから。
- ウ 材料となる土不足や、沖繩の気候が赤瓦を焼くには適さないなど、瓦を焼く環境が整わなかつたから。
- エ 材料となる土不足や、職人の不足など、赤瓦そのものを焼くことができなかつたから。

問六 傍線部⑤「その男くさせた」とあるが、その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 沖繩を代表する芸術家として評価を得ていた自分が、赤瓦を焼けないはずがないと思ったから。
- イ 沖繩を代表する職人だった父が病に倒れたため、やり残した仕事を継承すべきだと思ったから。
- ウ 沖繩を代表する芸術家として県民の心の支えである首里城を自身の手で再建したいと思ったから。
- エ 沖繩を代表する職人だった父ではあるが、才能ある自分に越えられないはずがないと思ったから。

【三】次の文章を読んで後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧^{ていねい}に記入せよ。

ハンガリーからの留学生であるボラージュは三年間を期限として留学を認められている。城田家は家族の一員としてボラージュを迎え、共に生活していた。中学生になった城田恭太は、学校の試験でなかなか成績があがらず、「自分は頭が悪いのではないか？」と思うようになっていた。言葉の問題、異文化の問題、家族の問題、さまざまな問題をのりこえながら時が過ぎ、ボラージュにとつて城田家で過ごす、最後の冬を迎えていた。

「ここは、ぼくの家、みんな、遠慮^{えんりよ}しないで」

というボラージュの声が聞こえ、何人かの笑い声と足音が響いた。

「ただいま！」

ボラージュは大声で言い、居間のドアをあけた。ボラージュの後ろには、五人の国籍の異なる外国人が立っていた。

恭太は驚いて起きあがり、フックはそれぞれの人間のおいにおいをかぐために、彼らに近づいていった。

「この犬はフック。自分を犬だと思っていない。だから心配しないで」

とボラージュは二メートル近い大男の黒人に言い、恭太をみんなに紹介した。

ボラージュは、留学生用の寮^{*1}で知り合った友人たちを連れてきたのだった。ひとりにはケニアからの留学生で、建築工学の修士課程^{*2}の学生だという。中国人が二人、カナダ人とイギリス人がひとりずつ、笑顔で恭太に握手した。

「みんな、自分の家だと思って、気楽に、気楽に」

ボラージュの言葉で、五人の留学生は居間に入ってきた。ボラージュよりも日本語がうまいのは**日本の古典文学**を研究しているイギリス人の青年で、ケニア人が最も日本語が下手だった。しかし、恭太はその二メートル近い大男のケニア人のゆったりとした笑顔にひかれた。

〈 中略 〉

「ぼくは、ウモニ。ケニアで、ぼくの家族は、ぼくをウモと呼びます。恭太もウモと呼んでください」
と青年は言つて、ポケットから朱色の石を出した。

「赤い石」

ウモは、ゴルフボールくらいの大さきの朱色の石を手のひらにのせ、それを恭太の顔前に差しだした。

「十四歳のとき、ぼくの父の父からもらった。自分に勝つための石」

「おまじない？」

と恭太はきいたが、〈おまじない〉という意味が、ウモにはわからなかった。しかし、ウモは、

「これは、神ではない」

と言った。

②「悪い心をつぶす石。たとえば、人の物を盗む心、なまける心、嘘をつく心……。そんな心が自分の中に生まれたら、この石で自分の胸をたたく。悪い心は、つぶれる」

*⁴「ほんまにつぶれるの？」

ウモは少し考えてから、首を左右に振り、また考え込んだ。自分の言いたいことを、どう日本語にするかを考えているのだろうと恭

太はサツした。

「悪い心をつぶすのは自分の力。この石は、自分の力を応援します」

ウモはそう言い、ケニア語で何かつぶやいてから、朱色の石で自分の胸を軽くたたいた。

「何て言うたん？」

「ケニアに帰りたい。両親や兄弟にあいたい。ぼくはいまそう言った。それは悪い心。ぼくの日本での勉強は、まだ終わっていない。だから、そんな心は、悪い心です」

「日本に来て、何年たつの？」

「二年。二年間、両親や兄弟にあってない。とてもあいたい」

それから、ウモは、朱色の石を恭太の手のひらにのせ、

「恭太にあげます」

と言ってほほえんだ。この世にこんなにも白い歯があるだろうかと思いつつ、恭太はウモのほほえみと朱色の石を交互に見つめた。

「ぼくがもろてもええのん。ウモの宝物やろ？」

「恭太にあげます」

恭太は、こんなにも大切なものを、ウモがどうしてもこの自分にくれるのかわからなかった。

「なんで、ぼくにくれるの？」

ときいた。

「たくさん勉強して、大きくなったらケニアに来なさい。この石を、ぼくに返すために、ケニアに来なさい。アフリカには、医者が少ない。すばらしい医者になって、アフリカの病人たちを救いに来なさい」

「医者？」

恭太は、医者になろうなどとは考えてもいなかったが、なんだかウモの言葉に、戦慄に似た物を感じた。

ボラージュが、ウモを呼んでいた。ウモは立ち上がると、恭太を見つめ、ポケットから財布を出し、その中にしまっている写真を見せてくれた。二十人近いケニア人が写っている。老人もいれば子供もいる。

ウモは、自分たちの家族の写真だと言ってから、ひとりずつを指さし、

「これは、父、これは母。これは父の兄、これは父の妹……」と説明した。

「これは母の妹の子供。これは母の妹の子供の妻。これはその妹」

ウモの言葉には、伯父だとか従兄だとか、甥だとか姪だとかの言い方はなかった。それで、恭太はウモがそのような言葉を知らないのだと思い、

「お母さんの妹の子供やったら、従兄やろ？」

と言った。ウモは首を（X）、アフリカには、そんな表現はないのだと言った。

「伯母さん、伯父さん、従兄……。そんな言い方はアフリカにはない。私の父の妹。私の母の妹の息子……。そんなふうに言う」

ウモは、そう言って、再びおおらかなほほえみを恭太に注ぎ、写真に写っている半ズボンの少年を指さした。

「彼は、ぼくの弟。恭太と同じで十三歳。彼は、月が一番大きくなる日に生まれた。彼は、医者になるために、いま勉強している。アメリカに留学するために、ものすごく勉強しています。もうぼくよりも英語がうまくなった」

ウモは、恭太の部屋から出ると、居間の方に戻っていった。

恭太は、手のひらの中の、朱色の丸い石を見つめた。⑥ なんだかわけのわからない巨大なものが、自分の中に入ってきたような気がした。

自分は頭が悪いのだろうか。それともドリヨクが足りないのだろうか。自分はどうして成績がよくなるのだろうか…。
恭太は、あしたから、いつもより二時間、勉強の時間を増やそうと決め、ウモにもらった石で、自分の胸をたたいた。

【宮本輝『彗星物語』 文春文庫 ※問題作成の都合上、一部改変】

【注釈】

- *1 寮 学校などが学生のために設けている共同宿舍
- *2 建築工学 建物の構造などを研究する学問
- *3 修士課程 大学を卒業した者が進む大学院のコース
- *4 ほんまに 関西で使用されている方言で「本当に」の意、以下の注も同様に関西の方言での意
- *5 言うたん？ ここでは「言ったのか」の意
- *6 もろてもええのん ここでは「もらってもいいのか」の意

問一 二重傍線部 a～d について漢字の読みをひらがなで、カタカナを漢字に直して答えよ。

a 日本語が下手

b 恭太はサツした

c ほほえみを恭太に注ぎ

d ドリヨクが足りない

問二 傍線部① 「日本の古典文学」とあるが、次の一文から始まる日本の古典文学作品の名前をすべてひらがなで答えよ。

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。

問三 傍線部② 「悪い心をつぶす石」と同じ意味の表現を、本文中から九字で抜き出して答えよ。

問四 傍線部③ 「それは悪い心」について、以下の問いに答えよ。

1 「それ」の具体的な内容を二文で特定し、「〜と思うこと」に続くかたちで一文にまとめて答えよ。ただし、書く内容の順序は本文の内容順で答えること。

2 なぜ、「それ」は「悪い心」なのか。「〜から」に続く形で文章中から二十字以内で抜き出して答えよ。(句読点も含む)

問五 傍線部④ 「恭太はウモのほほえみと朱色の石を交互に見つめた」とあるが、このときの恭太の気持ちとして最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えよ。

ア 白い歯と朱色の石とあまりに対照的な色だったので、どちらも目に焼き付けたいという気持ち。

イ 本当はウモの笑顔にひかれているのだが、それを知られるのがはざかしいという気持ち。

ウ ウモが初対面の自分に、大切なものをなげくれるのかわからず、とまどっている気持ち。

エ ウモの笑顔も、この石も自分にとってはかけがえのないものだと感じている気持ち。

問六 傍線部⑤「戦慄に似たものを感じた」とあるが、この時の恭太の様子についての説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。なお、「戦慄」とは「恐れる」の意味で用いられている。

ア 勉強嫌いな自分には、医者になれるはずがないと自己嫌悪けんおにおちいつている。

イ 自分が医者になるという新たな生き方が提示されたことに衝撃しょうげきをうけている。

ウ 自分が医者になるなどからかうのもいい加減にしてほしいと怒っている。

エ 医者になるなどと考えたこともなかったが、医者の自分を想像してうれしくなっている。

問七 (X)に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア たてにふり イ よこにふり ウ まわして エ ながくして

問八 傍線部⑥「わけのわからないく気がした」とあるが、恭太の中に入ってきたような気がしたものとして、適当なものを次のア～オから二つ選び、記号で答えよ。(順不同)

ア 面白い習慣があるケニアに対する興味 イ 医者という将来の新たな生き方

ウ 最近会っていない従兄たちに会いたいというさみしさ エ 同じ年齢の人がケニアで頑張っていることへの驚き

オ 医者が十分にいる日本に生まれたことへの感謝

※問題は以上

